

当社のご祭神に関する「名草戸畔」伝説

当社のご祭神は神明帳によれば、「迦具土神」(火の神)となっているが、一説には「名草戸畔」の頭を祀るとも伝えられる。

名草戸畔は、名草山の東麓・吉原の地に本陣を構えた豪族の首長であった。太田亮氏の『姓氏家系大辞典』にもあるように、「名草戸畔のことは厳然たる事実であって、何らかの大事件が起こったことは、この地方の伝承で伺い知ることができると記している。

時は日本の黎明期、各地には豪族が割拠して覇を競い合っていた。日向では頭角を現した伊波礼毘古命(後の神武天皇)兄弟が、九州を勢力下に収め、行く行く各地を平定しつつ、一路、大和を目指して攻め上ろうとした。だが紀ノ国では、思わぬ抵抗勢力の反撃に苦汁を強いられる羽目となった。「毛見ノ浜」に上陸した東征軍は、これを迎え撃つ名草戸畔の軍勢と死闘を繰り広げた。東征軍は皇兄の五瀬命を失い、鎮魂の地には竈山神社が創建された。一方、名草戸畔はここを先途と勇戦奮闘したが、その甲斐もなくあえない最期を遂げた。

そこで邑人は泣く泣くその頭を携え、小野田の里に身を潜め、高倉山の北麓にあるこの小高い山に葬ったのが、「おこべさん」の由来だと言われる。

因みに、名草戸畔の腹部は、杉尾神社(高倉山の南麓、海南市阪井)に、脚部は、千種神社(海南市重根)に祀られていると言われる。